

老舗の街・尾張町シリーズ24

尾張町を支えた女たち その拾参

一筋に生きれば良いことも



表紙絵 石野瑠一(宝生流教授囑託・石川郷土史学会)

目 次

はじめに	1
嫁ぐ先も親戚	2
レンガ造りの建物を見ながら	4
萩の棒で頭を打たれたり	6
七つ橋めぐりの伝え話を身近に感じて	8
自前の花市場をしていたころ	11
商いは「現金」で、お客さんは「こころ」で	12
花との対話	14
習い事の一つも出来ないと	16
フラワーデザインを覚え始めて	18
息子の嫁は教室の生徒さん	20
店先の気配り、奥の気配り	21
あとがき	25

はじめに

「まいどおおきに。いつもお世話になって、先だつてはまたありがとうございます」

著者の私が言うのも何んだけど、小さいとき、親と一緒に街の中を歩くことほど嫌なことはなかった。しばらく歩くと、誰かしら知った人に会うし、その度に丁寧に挨拶して挨拶をする。

やっと店の仕事も一段落し、親と水入らずの時間が持てたと思うたのに。あつという間に自分たちの世界に他の人が入り込んでくる。いつもは、「お客様が第一、お客様があつてこそその毎日の生活がある」それこそ、ご飯の最中だろうが何をしよう、お客さんが来れば、何もかもうつちゃって笑顔で対応する。朝から晩まで、休みも一応はあるけど、それもお客さん次第。

「今日、お休みやけど、お店やってますか」

と電話なんかで問い合わせがくれば、もうたちまち

「何構いません、いつでもどうぞ。」

まるで自分の時間というものがないような生活の連続。

それはそれで、商売屋というものはそんなもんだと、幼い頃から体に馴染んでしまっているから抵抗はない。けど、店を離れて、やっと作れた貴重な個人の時間のはずなのに、知った人に会ったとたん父は商店主の顔に戻ってしまう。

「もう本当に、せつかく自分たちだけの時間を持てたのに……」

ちょっとふくれっ面をしていると

「ごめんごめん、ちょっと知った人だったもんで、挨拶してただけやから」

父は軽い気持ちで言うけれど、私のところは大きく傷ついてしまっている。

ところが、自分が商売の表に立って、店主や、それと同じような立場になってみると、無意識に挨拶をしてしまっている。またそのことに気づくのが疎いのだろうか。子供や女房から

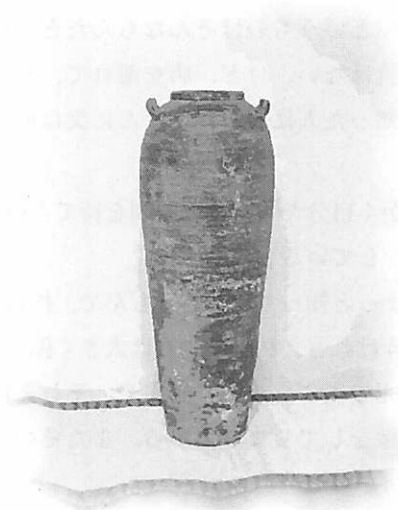
「お父さん、今はお休みの時間なんですよ」

と言われた時に、歴史は繰り返していることに思い知らされる。でも、ここ金沢では、大都会のように人口もたくさんある訳でなし、”隣は何する人”なんてことはあり得ない。そこら辺を歩けば、必ず知った顔に出会うし。初対面の人でも、話をしていると誰か知っている人との繋がりが見つかったりする。

要は、そんな環境を煩わしいと感じるか、触れ合いがあると感じるか。一説には、人口50万人を境にして、ウェットな町か、ドライな町かに分けられるとか。43万人強の金沢に住んでいる私達にとって、そんな環境を好ましいと思いたい。

嫁ぐ先も親戚

生まれた家と、この嫁いで来た家は、本家と分家という間柄やったもので、別に結婚したからといわんでも、常日頃からよく行き来してたもんや。難しくいうたら、実家の方が本家筋に当たるらしいけど、いろんなことがあって今はここの方が実質上の本家になっている。それだけ、商いにも勢いがあるっちゅうことになるんかね。何も知らん人が嫁に入って来たら、きっとそんなややこしい親戚関係に戸惑うたかもしれん。



法事なんかの時には、そりやもう席をどうするかが大変な仕事になる。ここは本家のご当主が座り、あつちは分家の、こちらは本家筋の、それから分家筋の……、ああ、ややこしい。ちょっとでも間違えようものなら、たちまち親族会議なんてことにもなりかねんし。氣遣いは人一倍なのに、上手くいっても当たり前という顔で、誰も褒めてくれる訳やなし。

ましてお姑さんが、おばさんになるもので、最初は気軽に思っていたのに、とんでもない。かえって氣心が分っているから尚更に何でも厳しく、これなら赤の他人のお姑さんの家へ嫁いだ方が良かったのでは。と思うてみたり。

でもお父さん(主人)は優しい人で、ちょっとハチャメチャの氣のある私にはもったいない位。本当は、ここの店には娘さんばかりが三人いて、そのどれかの娘さんと商売を続けて欲しいとの氣持ちで、小坂村から3中まで出たお父さんがずっと前に養子に入っていたんや。けど、上二人の娘さんが順番に亡うなつてしもうて、一番下の娘さんは商売を継ぐ氣がなかったもので、私なら花の商売のことも分かっているし血の繋がりもあるやろうからと、話がまとまったんや。

橋場のこの店に入ったのは、ようやく天氣が良くなる5月になってから。冬場はコロコロ変わる天氣を相手にして、しょっちゅう花の世話に氣を遣っているさかい落ち着いた氣持ちにならんかったしね。

いつも遊びに行くのと違うて、今度はもう家へ帰ることが出来なくなるので、何んやら少うし寂しくなるような氣持ちもあつたけど。お互いに知り合い同志やったから、そんなに派手なこともせず嫁いで来た。後から思い出してみると、11月に昭和天皇さんの即位の大典があつた年(昭和3)に生まれて、近江町のアーケードの完成する年(昭和23)に嫁いだんやったから、晴れがましい時ばかりになるね。

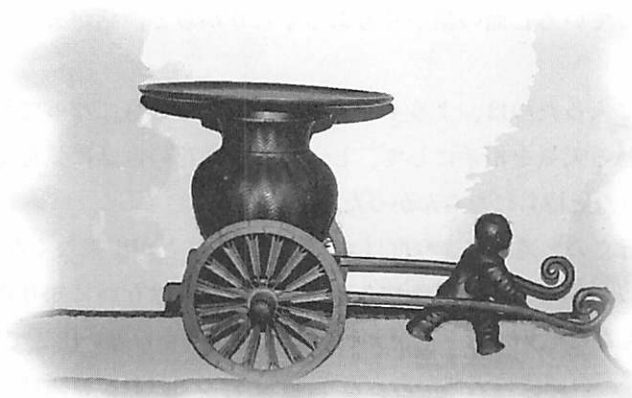
ちょっと学者肌のお父さんは、がさがさした商売屋に育つた私には新鮮に見えたし。それに、働くことに関しては人一倍の頑張り家で、側で見ていても頼もしい感じの人やつた。そやけど、本当の詳しい商売のことになると、もしかしたら肌で花に囲まれて育つた私の方が知つとつたかもしれん。すんません、

お父さん。

レンガ造りの建物を見ながら

この店のお舅さんは、尾張町と一緒に賑わう懸造り(かけづくり)と呼ばれる橋場町で店を張って来ただけに、実家の堀川とは違った裁量があったんやろ。代々借金は男の甲斐性なんて考えているんか、お茶花のために卯辰山に土地を買ったり、いち早く3階建てのレンガ作りの店を明治の頃に建ててみたり。兎に角、人の話の種によく出ることが多かった人や。

何んや、すぐ隣の料亭の大旦那さんと親しくて、よく二人して話し込んでいたとか。そいでもって



「借金は男の甲斐性や。今の商売より、もっと先のことを考えて手を打ってこそ本望や。わしらは、これからのことを”一所懸命”に考えているんやさかい、細かいことでぐだぐだ言うてくれるな。」

という具合で、どんどん二人して先へ先へと進むもので、家族のみんなはついて行くのに大変だったみたい。でも私から見ても、思いつ切り自分の夢へ向かった形としてのこのレンガ作りの建物は、なにか小気味いい感じがする。お隣の料亭も、金沢の有名な旦那さんが何人も食べに来て繁盛しているし。

もともと懸造りというのも、難しくいうたら誰の土地でもない税金の掛からない浅野川河原の崖の所に仮小屋を建てて商売した”崖作り”が始まりとか。でも私らが聞いているのは仮家の中にいろんな商品を掛けて、誰でもが外から中にあるものを楽しんで見られるようにした”掛け作り”が始まりとか。どっちにしても、大店の尾張町とはちょっと違うても賑わいは大したものやった。

商売屋に育ったためかしら。しみりとしたことよりも、明るく楽しい方がいいに決まっている。嫁になって改めて橋場の店を見回してみると、同じ花の商売をしても、堀川の実家は地味な風に思えた。というても西と東の別院のお花は一手に引き受けるほどの勢いやったんやけど。目の前のお客さんの華やかさが違うここの方がどんだけ性に合っていることか。



と調べてみたのも最初のうちだけ。表では明るく華やかでも、締めるところはあきれる程にきちっとしているし、無駄なことはとことんしない。何よりも世間体だけで金を使うことだけはしない。使う時は、今すぐでなくてもいつかは何か成果が出るものにしか出さない。子供として店の手伝いをしていた気持ちとはもう一つ違ったものに気がつかされた。

嫁いだ時に、立派なレンガ作りの割に二階の床板がガタガタしていたこともそうや。何んでこんな所に工事の手を抜いていたんやろと思うていたら、そうやないんや。二階で大きな御所車を作って、それに牡丹やらいろんな花を飾りつけると、カサがでかくなってしまふもんで、床板をまくって下へ降ろすようにしてあるさかいや。

ほんなら、ややこしいことせんと、最初から一階で作れば大変なことをせずにくすむのに。と思うのは何んも考えのない浅い人。あんな大きな物を一階で作ったたら、店に来てくれるお客さんがゆつくり入れんことになる。

お客さんが店先で心行くまで花を選んでもらうためには、それくらいの配慮をせな。私が、私がと自分の都合ばかり思うとったら、お客さんは寄りつかんようになってしまう。お客さんがあってこそその商売やし、私らの生活も出来るのや。お客さんが喜んでくれれば、私らも喜べる。そのためのちょっとした工夫を辛いと思えるはずがない。

そやそや、一階の床板もまくれるようになっていたんや。こちらは戸室石で作った地下室への出入り口になっていて、水槽もあって花を保存するように作ってあった。けど、ここは案外に居心地が良くて、冬は温ったかいし、夏は涼しいもんで、こっそり西瓜を冷やしたこともあったつけ。

萩の棒で頭を打たれたり

お父さんとの生活は、そんな店の後ろにある倉庫との間のセド(「通り庭」と呼ばれる通路)の横の離れやった。ちょっと見には、新婚が離れで生活出来るなんて、あの頃としては羨ましがられるようやった。けど、現実はそのまんやなかった。

大姑さんは店の2階にいるからまだいいけど、お姑さんが店の奥の部屋におるもんで、何かにつけ挨拶をして通らないかんかったのや。これが大変。用事があっても、言い訳がましく一言喋ることがだんだん大層になって来るし。ほとんど、夜は外へ出かけることが出来んといった方が確かやった。朝も、お姑さんより早く起きて仕事にかからないと、何こそ言われるか分からないし。

住み込みと、通いで5～6人もいたやろか。食事の準備もせないかんし。二人になっても、あんまし落ち着いた気分にはなれんかった。カキモチを焼くのにも、気を使う有り様やったし。

言ってみれば、いつもいつもお姑さんという関所に、気を張り詰め通しになるっちゅうこと。自分の思ったことを、すばすぱつとして来た私には、拷を受ける気持ちにさせられることやった。それでも、お父さんはお姑さんには、可哀想なくらい遠慮していた。



せつかく養子に迎えたのに、あんたがもたもたしていたから上の娘は亡くな

るし、支那事変なんかへ行くから次の娘も待ちきれずに亡くなるし。ほんに”こぬか”(落ちこぼれ養子)や、とでも言われ続けていたのかしら。

でも、私みたいな者には、涙が出るくらい立派でありがたい人やった。近頃の店先では、まるで家付き娘みたいにお父さんより目立つように見られているけど、お父さんがいないと何にも出来ないんや。

それなのに、お姑さんからは、まだ働きが悪いと萩の棒で頭を打たれたりするのを見ると、つい我を忘れてお姑さんに喰ってかかってしまう。お父さんは贅沢ひとつせず、ほとんど終日、『金子』と書かれた前掛けひとつで過ごしていたし。私らの新婚旅行だって、特別してたこともなかったし。

商売屋というもんは、あんまり人様を羨ましがらせるようなことはしたらいかん。あんまり格好良すぎることをすると、かえってお客さんから疎まれる。と、聞かされていたから、自分のことよりも店のことを先にしていたのに。いつまで辛抱せなならんのやろ。

辛くなると、明日のことを考えることにしている。今日、どんなに辛く苦しく格好悪くっても、今を耐え続けて行けば、明日は今日より少しは楽しく強くなれる。それに、いつかは私ら夫婦と子供たちの時代がやって来る。息子の嫁には、辛い思いをさせないようにしよう。勿論、仕事は厳しくみっちり仕込むけど。

お陰で、子供たちには恵まれて、お城の中に金沢大学が入って来た年(昭和24)に長女が、武蔵大和デパートの中で初めての民間放送[MRO]がラジオの声を出した年(昭和26)に長男が、そして卯辰山が国指定の公園になった年(昭和30)に次男がそれぞれ生まれて、家といわず店といわず、急に賑やかになって来たのは嬉しいことやった。

七つ橋めぐりの伝え話を身近に感じて

浅野川というたら、金沢のもう片一方の犀川の男川と言われるのに対して、”女川”と言われていたんやった。最初のうちは何んのことをいうとるのか分からなかったけど”麻の川”と当て字を書いたりする位に、犀川ほど氾濫したり、

流れが速くないんや。それに、こっち側には主計町(かずえまち)茶屋街、あっち側には東(ひがし)茶屋街があるし、女の人が多く界限に住む川だからっていうんで名付けられたんかね。



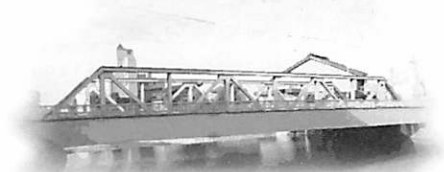
男の人のように、どんどん外へ出て気を紛らわすことも出来んことの多い女の人にとっては、ちょこっと出かけて済ます”願掛け”が流行るみたい。子供のころに、堀川の実家からここに遊びに来ていた時には、そんな”願掛け”の風習があることを人事のように思うとった。



けど、ここで生活するようになると、私も『七つ橋めぐり』の願掛けをしてみようかな、という気になるから不思議なもんや。”浅野川に架かる七つの橋を回ると願い事が叶う”とはいうても、ちょっとした決まりがあるんや。

- ・必ず一筆書きのようにして回ることに、同じ橋は通らない
- ・人と出会っても口をきいてはいけない、話しをしたら願い事は叶わなくなると、伝えられている訳。

お彼岸の前日の、夜の12時に始めるのが一番と言われているので、さあ出発。それも、出来ればまだ寒くて天気の落ち着いた春のお彼岸より、気候の落ち着いた秋の方が良いと聞いているんやけど。ま、いいか。



常盤橋....天神橋....梅の橋....浅野川大橋....中の橋....小橋....昌永橋



さすがに、これだけを回ると小一時間にもなるもので、下の方が近くなってしまうと困ることもある。一番困るのは、誰か知っている人に会って、挨拶されることや。口をきいてはいけないことになっているから、そんな時は身振り手

振りで願掛けをしていることを現し、口に指を立てて話せないことを知ってもらうだけ。けど、この辺の人は皆んな『七つ橋めぐり』のことを知っているから、多少身振り手振りが下手でも、ああ成る程と納得して、笑顔でうなずいて別れてくれるからほっとする。

無事に回り終わると、願掛けしていた願い事は叶うし、その年は無病息災で過ごせると聞いている。お年寄りには、体が弱っても、垂れ流ししないですむといわれている。でも、そんなことより、やっぱりお父さんの仕事のこととか、子供たちのこととかの方が先に頭に浮かんでしまう。

「あれっ! 自分のことを願い忘れてしまった。ま、皆んなが良くなれば、私に回り巡って返って来るからいいか。」

自前の花市場をしていたころ



今でこそ金沢市の花き市場が出来て(昭和62年)随分と楽になったけど、昔は

自前の花市場を持つとらんと花が捌げんかった。先代さんなんか、市場だけでのうてあっちこっちへ売りに出掛けたくらいやった。けど、聞いた話では、よく売れる温泉町なんかへ売りに行くと、妙に日にちが掛かり、あげくの果てに代金はちょびつとしか持って帰らんことが多かったとか。それでもって、「男の甲斐性や」なんて、分かったような分からんようなことを言うてみたり。そんなもん、女の私らだって、何んに使うたかお見通しナンニ(なのに)。本当に男の人ってのは性のないもんやけど、可愛い気があって憎めんもんや。もつともお父さんに限っては、先代さんのようなことはないけれど。

でも、商売ってのはお客さんからお金をもらってなんぼの世界やし。どんなに愛想良くしてくれても、いつまでもお金を払ってくれんかったら何にもならん。そやさかい、反対の意味で支払いはいつも現金ですぐに払っていたもんや。花を作っている生産者の人にとっては、長い手間暇を掛けてやっ売り物になった花だけに、売れたらすぐにお金が欲しいはずやし。

それなのに、うちの彦三の花市に買い付けに来る業者の人たちは、なんだかんだ理屈を言いながら、結局はいつまでも代金を払ってくれない。だんだん借金が大きくなってくると、顔を見せないようになってくるのでおかしいと思うたら、隣の花市場へ動いて行ったりするもんで、本当に困らされた。

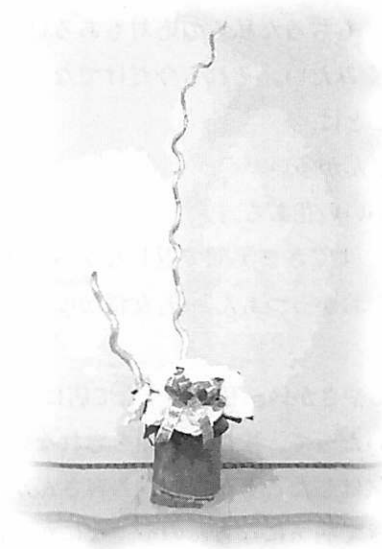
あの人たちは、商売ってもんがどんなものか分かっているんかしら。そんな場当たりの仕入れをしていたんでは、結局はお客さんに迷惑を掛けることになって、自分の信用を無くしてしまうのに。

まあ、人様の商売のことだから気にしなくていいんだけど。その前に、やっばしうちの店へのお金だけはきちんとはらって欲しい。どんなに愛想よくたって、お金を払って初めて商売を全部すませることになるんやさかい。

商いは「現金」で、お客さんは「ころ」で

そやさかい、人の振りして我が身を〜、じゃないけど支払いだけは借金をしでもするくらいの気構えで商いを続けて来た。ちょっとでも遅れたりしたら、私が自前の花市場で感じていたことと同じことを仕入れ先の人に覚えさせてし

まう。



きちんきちん、とお金を払って行くことで、皆んな安心してここの店に良い品物を持って来てくれるのやし。特に花を作っている生産者といわれる人たちは、花を育てるのに長い時間を掛けてから持ってくるので、お金は早いにこしたことはない。それに、生産者の人たちは、自分の作る花にこだわりを持つ職人さんみたいなもんやから、純朴な人が多いのや。

自分の仕事を評価してもらえば、すぐさまお金を払ってもらえる。と、思っている気持ちを大事にしてあげることが、いい花をいつも仕入れられることになる。売掛金がすぐに現金にならないもんで、しばらく立替える形になり、ちょっと苦しいけれど。長い目で見ようとすれば、その辺の苦しさも頑張り甲斐と考えてるんや。

でも、せつかくこの店に来てもらっているお客さんには、そんな仕入れのやりとりの気持ちは露ほども出せない。苦勞して、こらえて仕入れた花は、店先

に並べてもやっぱりなにかが違うように見える。生き生きしているように感じるというか。

お客さんも、理屈でなくって、なにかこの店の花は違うと感じてくれるみたい。一度来たお客さんは、もちろん私らの対応もあるけれど、いい花を揃えていることには、すぐ気づくみたい。それも今だけでなく、いつ来ても、季節なりにいい花が揃っていることに。

だから、この店は常連さんが多い。

「おはよう。今日は何かいい花ある。」

と、声をかけられた時、すぐさま笑顔で返しながら、花を差し出すタイミング。人任せでなく、店の”おかつあん”(若女将)がいつもいて、采配を振ることが肝心なのかね。

あなたが大事なお客さんやさかい、私がこうして店に出ているんですよ。

たとえ、店の奥の方にはいたって、挨拶と笑顔を忘れないというんか。お陰で、大病といわれるほどの病気はしたことがない。お客さんが来てくれるからこそ、毎日の仕事に張りが出てきて病気にならんや。なにか、商売させてもろうて、その上元気にさせてもろうて。感謝せなならん。

決して花を売って儲けるだけとかの「モノ」の付き合いでなく、お客さんとは「こころ」の付き合いが、結局は長続きするんやろね。値段がどうのこうのとかいう話は、だからこの店ではめったにしない。ここで買えば、お金を払ったのに充分見合う花が手に入ることを、お客さんは良く知っているからだし。また、それに答えられる花揃えはしとるつもりやし。

花との対話

毎日毎日、店で花を見ていると、この花はどちらへ向きたいか、ということがなんとなく分かってくるもんや。花は、ただ単に形が綺麗とかそんなものでなく、花だって生き物なんやから。気持ちの良い時もあるやろし、反対に気持ちの悪い時もある。

花も私らと同じ感情を持つと考えると見ることから、対話が始まるみたい。そ

りゃ、土に根を張って、お日さまに向かって花を咲かせるのが一番かもしれない。でも、美しく成長してこの店に運ばれて来たら、せめて茎を切って、少しでも水を吸い易いようにしてやったり。少しでも気持ちが良くなるような場所に持って行ってあげたい。そんな気持ちが、花に通じないはずはない。



ある時、耳を傾けると、花の話し声が聞こえて来る。

「ありがとう。良くしてもらって。」小さなすかすかな声だけど、私らには確かに聞こえる。

生産者の人が花を育てるのも手間暇かかるけど、こきの店に来てお客さんに飾ってもらうまでも、いろんな手間暇がかかる。生き物として、その美しさに価値を見い出してあげると、見違えるように綺麗になるから不思議なもの。だから、ついつい手を多く取られてしまう。

たくさんのお花が、一時に入ってきて来たりすると、もう戦さ場や。お互いが花と向かい合うために、それ以外の人と話も出来なくなってしまう。あげくの果て

は、ご飯まで一緒に食べられなくなってしまうほど。

あれっ。これは、昔、私の小さい頃、一番嫌やった家族一緒にご飯が食べられないことと同じじゃないかしら。いつの間にか、立場が違って来ていることに苦笑いしてしまう。

習い事の一つも出来ないと

近ごろになって気づいたんやけど、他の地域ではあんまし習い事をしている商売屋はないんやね。小さい頃から、商売が一段落した時間に(一段落させた時間といた方がいいかもしれないけど)、三味線の先生やお茶の先生、お謡の先生にと店の奥に来てもらう。

「ささ、先生どうぞ。今日はお寒いのにお願いします」
茶の間の一番上座に座ってもらって、お父さんや私に子供たち。皆んなが揃って、先生のお手並みを拝見させてもらう。勿論、その間は忙しい商売もしばらくは棚上げ。



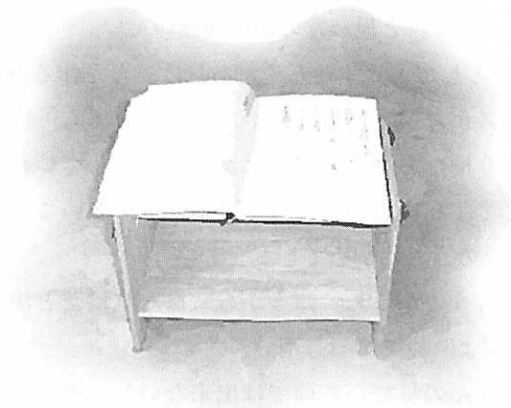
いつもいつも「お客さんがあってこそその商売、お客さんの言うことは無理でも、はいはいと素直に相返答をして聞くもの....」と言っている姑さんやお父さんも、この時ばかりは別や。やっと家族が水入らずになれる時やさかい、私にとっては先生様々。大姑さんだつて、三味線を稽古している間は、仏様のように優しくなると聞くし。

難しいお話の時も、曲がりくねって読めない昔の字を、変な声を出していても満たされた気持ちになる。ちょこっと眠たくなるけど、先生すみません。ちょっと下を向きながら、あくびを噛みこらえる。

「はい、それでは今話ったところをもう一度、今度は一人だけで話ってください」

えっ、どこだっけ....。

「あ～、う～、、、はなさかあばあ、つうげえんとおいしいやあまあざあとおの～」



顔を上げると先生の笑顔が見える。

そろそろ足がしびれて来て、モゾモゾしてるんやけど、こっちも無理して笑顔返す。とたんに、アツツツ……。ちょっと動いたとたんに、足のしびれの痛さが頭のテッペンまで来てしまったみたい。

「じゃ、この辺で一度休みますか。足のしびれをほぐしてから、もう一度おさらいしますから」

やっぱし、先生は違うんかしら。ちゃんと、こっちのことをお見通しなんやから。こんな風に、私らもお客さんのところを見通せたら、どんなにいいかしら。

フラワーデザインを覚え始めて

昭和の30年ころやったと思う。東京から「コサージュを作ってくれ」といわれ、最初は何のことやら分らなくてオロオロしていると、お父さんに教えてもらうて納得した。要はフラワーデザインのことやった。

「そんなら私もやってみたい」

どんなことが教えてくれたお父さんやから、そう言えば協力まではしなくても理解はしてくれるはず。と思ったのが大間違い。

「お前がそんなことしてどうするんや。あれは、ただ作るだけやのうて、こう何んていうかセンスがないと駄目なんや。とてとても、店の前で大きな声を上げるのだけが取り柄なんやから、それだけで満足していればいいやろ。出来んことに手を出して、痛い思いをするだけや。さ、悪いこといわんから、分相応ということで、今のうちにやめてしまいまし。」

もう、何てこと言うのかしら。頭っから駄目だ駄目だと決めつけて。私だってやれば出来るはずよ。見てらっしゃい。

こうなればお父さんの見ている前では出来ないし。夜、眠っていびきをかく頃にそっと起き出して、一人であれこれと本を読んで勉強してみたり。

思い余って、実家の母にまで聞きに行ったり。

「ね、お母さん。あんなこという、お父さんを見返してやりたいの。そやさ
かい、花の作り方を教えて....」

ところが、ここでも

「嫁に行った娘が、いい大人になって何を言いに来るんや。教えてあげられ
ないよ。」

仕方なく帰って、あれこれ思い悩んでいると、実家の母から呼び出されて

「ほら、これ持って行くまっし」

と、渡されたものは、ちゃ〜んと良いのに仕上がったお花なんや。

「後で、じっくり自分の目で見て、何を、どういう風に作るか勉強するんや
よ。」

ああ、やっぱり実家の母さんや。私が、回りのことも良く見ないままに、実
家の店先で話したりしたもんで、母は娘の嫁ぎ先のことを配慮して、一旦はワ
ザと乱暴な口の聞き方をしてたんや。



私が私が、人に負けてたまるかいね、と思い込みすぎているのがいけなかったんやね。実母に感謝しながら、それから意外にすらすらと進み、フラワーデザインを作るアイデアも次々と沸くようになった。試しに出品した観音様を題材にした作品も、思いがけず賞をもらったりしたけど、それはあくまでいつもの店の仕事とは別。店は店としてしっかり仕事した上で、誰にも後ろ指されずに趣味として作る。この姿勢が大事みたい。

それにしても、なるべく自然のものと見回すと意外になくなっていることに驚かされる。お正月の”つくばね”ひとつにしても、昔は医王山へ行けばその辺にあったのに、今ではずっと山奥にまで入らないとなし。

でも、苦勞すればただけ、出来上がった作品には愛着が深くなってくるもの。作品展なんかに応募する時は、もう一人新しい子供が生まれたような気持ちになることもある。素直な気持ちで最初の作品は、自分だけの創意工夫で観音様をアレンジしたら、思いがけず日本一になってしまった。勿論、お金なんか目当てでなかったのだから、賞金はすぐ寄付したけど。お父さんの見る目もお陰で優しくなるようになったが何よりうれしいことやった。

息子の嫁は教室の生徒さん

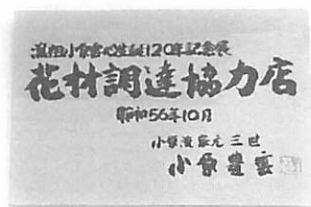
昔は”一位 “・” 正木(まさき)” ・” ひば” ・” 朝鮮まき” といったお花の稽古をして、これを順繰りに修行して上手くなったら、やっとお嫁に行けたとか。それだけ、お稽古ごとが厳しかったのかしら。教える先生の権威も堂々としていたみたい。

思えばこの建物も、市電が通るといって立て直し、古くなったといってまた立て替えて、次々と新しい顔を見せている。今では1階が店、2階がフラワー教室、3階が私らの住まい4階は息子たちの生活の場所となっている。

親の商売の姿勢を背中で見えてくれたんか、時々息子の掛け声の方が大きく響くようになって来ている。いつの間にか、お花の免状も持ち、2階でフラワー教室の先生を若くしてするようになっていた。

ちょうどそんな折、元気のよい生徒さんが、若く見える息子を先生と思わず

に気軽に話しかけて来るようになった。そりゃ、最初は同じ生徒同志やと思われて、いろんなことを言われていれば、息子も戸惑ったことやろ。でも、一つ一つ丁寧に答えている内に



「あれっ、この人、生徒の割に詳しいんやね。まさか、若そうやけど先生なのかしら」

疑問が驚きに変わり、尊敬から愛情になるまで、そんなに時間はかからなかったみたい。今では、仲の良い夫婦で二人の子供も出来るほどに。夜、静かな時間になると、上の階から元気な響きが聞こえて来ると、何かところが温かくなる。

私にとって、上からの響きは、この店の未来へ続く音色になって聞こえてくるのやさかい。

店先の気配り、奥の気配り

今は、長男が店先に立っている。私は、ちょっと奥の方において、なじみのお

客さんが来ると、笑顔で挨拶している。朝が早く、立ちっぱなしで、水を使うので、本当はきつい仕事なんやけど、よくやってくれている。何より、花を捌くのは時間との勝負のようなところがある。わき目も振らず、まず捌いてからなんぼの世界のようなところがある。

でも、頼もしいと思う反面、親の目から見ると、やっぱし何か危なっかしい。そういう私だって、実家の母やお姑さんから、ずっとそうして見られて来ていたんやけど。いつまでも親と子はそういうものなのかも知れない。せめて、息子の自尊心に触れない程度に、陰から何かを手助けしてやりたい。



陰日なたなく働く店の子に、ボーナスの時に私から別に

「いつもご苦労さん」

と言って私のポケットマネーから心付けを渡したりとか。これは、会社としてはエコヒイキをすることになって良くないのかもしれないけど、形ばかり言っただけより、こころの風抜きみたいなもんや。と、自分で理屈を

つけてみたり。

きっと息子からは

「お母さん、きちんと働きにに応じた給料を渡しているんやから、余分なことせんといて」と、怒られるだけやけど。

息子の働きが良くなれば良くなるほど、なにか私の出番が少なくなるような気がして来る。嫁も、孫たちを学校へ見送ってから、店に出て来ている。本当は、お父さんと楽隠居してればいいんやけど、商売屋ってのは因果なものや。いつまでも店先に立って体を動かし、お客さんに気遣いしている方が、性に合っている。いつも何かをしていないと落ち着かんから貧乏性なんかね。

でも、こうしている方が体の具合もいいし、何より気持ちがスッキリする。

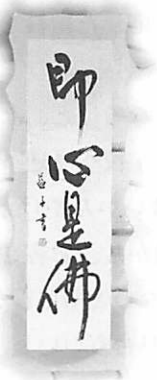


ちょこっと自慢話になるけど、お客さんから

「今日は買い物に来たんやない。おんたの元気な顔を見に来たんよ」

と、言われるほど嬉しいことはない。

ちよつとちよつと、いいお花があるから持って行くまっし。お代はいいから。
一番の宝物は、こうしてお客さんが、私の笑顔を見に来てくれることや。



金子益子・媼(おうな)について

昭和3年3月8日生。養子で入っていた夫に親戚筋の同じ花屋より嫁ぎ、持ち前の商売っ気をもって家業を盛り立てる。じつとせず、常に動き回ることによって店を活気づけ老舗の伝統を守るとともに、新しい事業展開をも進める。

あとがき

今年1月1日にお父さん(ご主人)が亡くなりました。ここにご冥福をお祈り申し上げます。四十九日を待ってこの小冊子は出版されましたが、その意思是しつかりと益子媪のころの中に生き続けています。

最終原稿の確認に、お店にお伺いした折も

「おはよう!」

と、元気な声で挨拶され、こちらが戸惑うくらい。

そう、商いをすることは”続けること”、”前へ進むこと”なのです。過去の価値をどのようにして今に生かして行くか。お話を聞いていた折には、その話の中なりに生き方を知らされていたつもりでした。でも、今回大きな事件を乗り越えて来たにも拘わらず、基本的な”ころ粹”は変わらせないまま日々の商いをする....。「有言実行」という言葉は簡単そうで案外に難しいのですが、こうもあざやかに、こだわりを越えて実行する姿があるとは。

橋場町で、尾張町界限での賑わいと活力は、こんな『おかつつあん』たちが店を支えてくれるからこそ、これまでも、これからも続いて行くのでしょう。

一方、ますます複雑に、そして世界各地との相互関連を踏まえて広範囲になる経済の中で、何が確実なのか問いたくなる昨今。ともすれば、自らの行き場を見失いがちになる場合すら出て来ている状況です。そんな折、日々を生き生きと商いする

『ここに生まれ、ここで生活し、ここで目をつぶる』人々の生きざまに、改めて目を向けるべきでしょう。”一生懸命”ではなく、”一所懸命”に一つの所で懸命に生きること、私は貴さを感じさせられるのです。

尾張町の小冊子シリーズは、そんな人々がいる限り、今後も書き続けて参ります。どうかご愛顧の程をよろしくお願い申し上げます。尚、昨年より情報化時代を踏まえ、インターネット上で全てのバックナンバーを見れるように致しました。

<http://www.ishinotent.co.jp/Tentou/book.html>

をご覧ください。また、国会図書館を始め東京・名古屋・京都・大阪のメイン図書館での閲覧、石川県内の公共図書館全てでも閲覧は出来るようになりましたことを申し添えさせていただきます。

項	目	内 容
○表紙		「前田のお殿さまから頂いた花瓶を記念して創った立花」
<目次>		
○嫁ぐ先も親戚		「江戸末期の花器」
○レンガ造りの建物を見ながら		「御所車の花活け」 「急須と小粋な花」
○萩の棒で頭を打たれたり		「ハート型の小粋な花」
○七つ橋めぐりの伝え話を身近に感じて		「常盤橋・天神橋」 「梅の橋・浅野川大橋」 「中の橋・小橋」 「昌永橋」
○自前の花市場をしていたころ		「壺に活けた小粋な花」
○商いは「現金」で、お客さんは「こころ」で		「小粋な花」
○花との対話		「選定ハサミで切る」
○習い事の一つも出来ない		「大姑さんや先祖が使ってた三味線」 「見台に乗せた謡本」
○フラワーデザインを覚え始めて		「初めての観音様のアレンジ作品」
○息子の嫁は教室の生徒さん		「小原流・嵯峨流の看板」
○店先の気配り、奥の気配り		「店先に並べた花」 「老舗百年会の看板」 「金子益子さんの書」 「中の橋」

発行=1999年2月吉日

著者=石野 琇一

さし絵=石野 琇一

発行所=金沢市尾張町1丁目11番8号

尾張町商店街振興組合

尾張町若手会